

被爆体験記録集

目黒区

目黒区平和都市宣言

かつて人びとは、戦火に包まれ悲しい歴史の一ページをつくった。

時は移り、

今、平和の尊さをしみじみと思う。

青い空、緑の木々。

街には明るいあいさつがかわされ、

人びとの顔にほほえみが浮かぶ。

この幸せを再び失ってはならない。

わたくしたちは、

地球のすべての人びととともに永遠の平和を築くよう努力する。

この誓いをこめて、

目黒区は平和憲法を擁護し、核兵器のない平和都市であることを宣言する。

昭和60年5月3日 目黒区

昭和20年10月初旬の広島



撮影 林 重男氏

はじめに

第二次世界大戦での日本における犠牲者数は三百万人以上といわれており、広島と長崎に投下された原爆により二十万人を超える方が亡くなられたといわれています。

戦争の悲惨さは、亡くなられた方の数だけで語れるものでは決してありません。亡くなられた方のご家族、戦争により生活の基盤を奪われた方、今もなお原爆の後遺症に苦しむ方など、本当に多くの方の人生を戦争が変えてしまいました。戦争の悲惨さを私達の先人は身をもって経験したのです。

昭和二十年八月十五日。戦争が終わり、時代は昭和から平成そして令和へと移り、七十五年の歳月が過ぎました。

今日の日本は、人口の約八十五%が戦後生まれとなり、先人の苦労と犠牲の上に築かれた平和と豊かさを享受しています。しかし、今も世界では戦争やテロが発生しており、多くの人々の生活を一瞬にして奪つた核兵器も未だなくなることはありません。その一方で、七十五年もの時の流れにより、日本における戦争や原爆の記憶は日々薄れつつあります。

目黒区は、昭和六十年に平和都市宣言を行い、以後毎年戦争犠牲者の追悼、核兵器の廃絶、世界の恒久平和を祈る平和祈念のつどいを実施するとともに、平成二年からは毎年、区内在住の小中学生を平和の特派員として広島市の平和記念式典に派遣し、原爆の恐ろしさや平和の尊さの体験学習を実施するとともに、そこで学んだ事を多くの区民に伝えてもらうための事業などを実施し、戦争の記憶を語り継ぐために取り組んでまいりました。

この度、戦後七十五年の節目を迎えるに当たり、区民の被爆体験記録集を作成いたしました。

戦争に関する実体験の中でも、原爆に関して直接体験をし、それを伝えられる方は年々少なくなっています。この貴重な体験を一人でも多くの人に語り継ぐために記録として残していく事は、平和都市を宣言した目黒区の重要な責務であると考えています。

この被爆体験記録集を作成するに当たりまして、区内にお住まいの被爆体験をされた方々にご協力を頂きました。当時の辛い記憶を思い返し、次世代のためにご寄稿を頂きましたことに心より感謝を申し上げます。

この記録集が多くの方に読まれ、世代を超えて戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを語り継ぐ一助となることを願います。

令和三年二月

目黒区長 青木 英二

平和都市宣言

はじめに

目次

被爆体験記録（五十音順、敬称略）

「四万六千日詣」「私の故郷 広島」「流燈」	勝又 洋子
「長崎での被爆体験」	中川 徳穂
「ピカドンの日」	西 光子
「戦争への責任はなくとも」	藤原 治子
「私の原爆記」	堀田 和子
「母・叔母から聞いた被爆当時の様子」	山本美智子

資料1

広島市原爆被害の概要	21
広島市原子爆弾被害状況図	23

原子爆弾による被害数値（広島）

長崎市原爆被害の概要

長崎原爆の被害状況図

被害状況（長崎）

資料2

めぐろ歴史資料館の戦争関連収蔵品紹介

資料3

平和の大切さを身近に感じよう

被
爆
体
驗
記
錄

しまんろくせんにちまいり
四万六千日詣

勝又 洋子

昭和二十年八月六日午前八時十五分広島に原爆が投下された。広島市内にあつた母の実家は倒壊し、生後一月余りだつた私とそこに居た家族全員が被爆した。またまたま近所に外出していた祖母はそのまま帰らぬ人となつた。父は祖母を捜して何日も怪我人や死体の間を歩き回つた。一月くらい経つて、十数キロ離れた小学校の講堂に保管されている遺骨の中には祖母の名前があつたと聞き、父は母の妹と一緒に遺骨を引き取りに行つた。

道ばたで被爆した祖母は皆と一緒にトラックで運ばれ、その小学校で亡くなつたということである。

突然自分の母親と生き別れになつた母は未だに夕方になると玄関から「ただいま」という祖母の声が聞こえるような気がすると言う。しかしそういう話はごく最近になるまで母から聞くことはなかつた。テレビやラジオで原爆の語り部の話を聞くようになつたのも最近になつてからで、両親からも親戚からも原爆の話は一切聞かされなかつた。

高度成長期の中、広島は物凄いスピードで復興し、原爆の跡形も無く生まれ変わった。

わつた。（原爆ドームさえ撤去される寸前であつた。）私は被爆者としての自覚はもちろん、何の不安もなく成長し、結婚し、三人の子供を産み育てることができた。今から思うと清涼飲料水も何も無かつた当時、放射能に汚染された水を飲み、野菜や米を食べて生き延びた私や家族がこのように何の後遺症も無く元気なのは奇跡的である。すべては原爆やその後遺症で亡くなつた祖母や親戚や友人をはじめ、多くの人達が身代りになつた御陰なのでと感謝するばかりである。

ところで私の誕生日の七月十日が「四万六千日」の日だということを知つ

たのは俳句を始めてからのことである。

この日一日お参りするだけで四万六千日分お参りしたことになるという大変有り難い日である。ここ数年来七月十日の誕生日には、浅草寺へ参詣し、鬼灯市で鬼灯を買い、帰りに仲見世の梅園で豆かんを食べて帰ることが自祝のパチーンになつてゐる。そして回を重ねる毎に、もしかして今私がこうして元氣でいられるのは、四万六千日の観音様の御加護ではないかと真剣に思うようになつて來ているのだと感謝するばかりである。

生き延びて四万六千日詣
(2010年「花鳥来」夏号
巻頭言より)
洋子

私の故郷

広島 ひろしま

勝又 洋子

ひろしま なな
広島は七つの川が瀬戸内海に注ぐデル
タの街 まち である。川は潮の満ち引きが著
しく引き潮の時は歩いて渡る事ができ
る。原爆で橋が落ちた時も歩いて川を渡
り家に辿り着いたと叔母から聞いた。現
在は戦後のバラツクも立ち退かれ緑豊か
な堤に変貌している。きれいになつたの
は川だけでは無い。小学生の頃昆虫や植
物採集に行つた城跡には鯉城が復元さ
れ、まるで別世界である。路面電車は力
ラフルになり、平和公園も見る度に美し

く整備され、原爆ドームは映画のセットのようにさえ見える。又、涼みがてらにカーブの団扇を持つて下駄履きでぞろぞろ出かけた市民球場も移転され立派になつた。私は十八で上京しそのまま東京に住んだので私の故郷というと昔の話になる。それも夏の思い出が多い。広島は朝夕の風が長くとにかく暑い。梅雨時にになると我が家では家中の襖を取り払い、代わりに鴨居から床までの家簾を吊す。子供心にも源氏物語のようで嬉しかつた。夜は風を入れるため窓や縁側はもちろん玄関も勝手口も開け放して部屋一杯に大きな蚊帳を吊つて寝た。日曜日とい

うと一家で泳ぎに行つた。父は人影の無い海岸に車を止め岩陰で昼寝をしたりして楽しんだが、幼い私はそんな淋しい所より遊具のある洒落た海水浴場に憧れた。しかし今思うとその静かに波の打ちよせる白い砂浜で、ゆつたり沖を見ている父の後ろ姿と傍らで日傘を差している母の姿が私の原風景のようにも思える。

ちちははにあと一息の残暑かな
(2017年「花鳥来」秋号より)
洋子

流燈

勝又 洋子

広島の実家を解体した時、古いピアノを引き取つた。私が生まれる前から母が亡くなるまで母の傍に在つた。譜面台脇の燭台や唐草模様の彫刻は今なお雅だが、無数の傷や変色した鍵盤には被爆の

跡が隠しきれない。

先日辻井伸行氏の弾く「悲愴」と「月光」を聴いた時、このピアノに通じるものを感じて深い感慨を覚えた。

広島の川は火の渦流燈会

洋子

(2020年「花鳥来」冬号より)

長崎での被爆体験

中川 徳穂

私は中学一年の十三才の時（中学校は城山町にあつた長崎商業中学校）、学徒動員で浦上三菱兵器工場（今は長崎大学になつております）へ部品の運搬員として働いていました。工場の入口には警備員がおり銃を肩に二・三人の人が出入りをチェックしていました。

原爆投下の日は八月でしたので、暑く、空は雲一つない澄みきつた日でした。その日は出勤間もなく警戒警報が発令され、皆それぞれ防空壕へ避難しました。

た。壕の中は一杯で、体半分は外に出てる状態でした。その後空襲警報が発令され、壕の中はむし風呂状態で気分を悪くする人も数人いました。それから何時間か経つて空襲警報が解除され、ほとんどの人が壕外へ出ました。もちろん私も一番先に出ました。皆さん汗びつしよりで皆上半身裸でした。もちろん私もそうでした。それから三十分位たつたのち、飛行機が一機ブーンと飛んで来ました。皆さんは友軍機だと大喜びでタオルや手を振つたものです。皆さん喜んでいましたが、それがB29でした。一万米以上

です。ところが私の目には落下傘がつい
てるよう^みに見え、原爆^{げんばく}はユラユラとゆつ
くり落^おちる様^{よう}にみえ、その間^{あいだ} B29も見
えなくなりました。私は飛行機^{ひこうき}も見えな
くなつたので工場^{こうじょう}の中^{なか}へ戻^{もど}りました。中
では人間魚雷^{にんげんぎょらい}らしきものがあり、それに
乗^のつて遊^{あそ}ぼうとした矢先^{やさき}、ピカート^{とばげ}
しい音^{おと}がして廻^{まわ}りは真^{まつ}黃^き色^{いろ}な世界^{せかい}に包^{つつ}
れ、一寸^{いつすん}先^{さき}何も見えませんでした。それ
から三秒^{さんび}位^{よう}たつたでしょ^ううか、天地^{てんち}をと
どろかすドカーンと大き^{おお}な音^{おと}がして外^{そと}か
らは四^し・五^ご人の人が助^{たす}けて!!と這^はい入^い
て來^きたのをおぼえています。私は人間魚雷^{にんげんぎょ}
と一緒に吹^ふき飛^とばされ、顔^{かお}や背^せに多少^{たじょう}

の傷^{きず}を負^おいながら氣絶^{きぜつ}していました。そ
れから暫く^{しばら}して工場^{こうじょう}の責任者^{せきにんしゃ}らしき人に
声^{こゑ}をかけられ、正氣^{じょうき}に戻^{もど}りました。それ
私も傷^{きず}はあまりたいした事^{こと}ありませんで
したので工場^{こうじょう}の外^{そと}へ出^でました。ところが
外^{そと}へ出^でみるとあつちこつちで死体^{しだい}の山^{やま}
です。生^いきている人^{ひと}でも火傷^{やけど}がはげしく、
唯^{ただ}、水^{みず}をくれ水^{みず}をくれの一言^{ひとこと}で息^{いき}が絶え
ました。怪我^{けが}して^{ひと}る人^{ひと}でも殆^{ほと}んどが火傷^{やけど}
で、火傷^{やけど}と言^いつても水^{みず}ぶくれがコブシ大^{だい}
の大き^{おお}さで薬^{くすり}も無いし手^てのほどこしよう
がありませんでした。私は怪我^{けが}して^{ひと}るも
う一人の人^{ひと}と二人^{ふたり}で表^{おもて}にあつた食堂^{しょくどう}へ行^い

きました。食堂は三階建てでしたが、ペ
チャンコにつぶれており、中からは女性
数名のウメキ声、また、助けてー!!の声
がかすかに聞こえるのでバール一本も無
く十四才の少年にはどうする事もできま
せんでした。でもどうにかしたいと外を
見まわすと、すでにあちこちで火の手が
あがっていました。食堂の女性を救助で
きなかつたのは非常に残念でした。日も
暮れかかり家に帰ろうと思いましたが、
その時は一面火の海で道路も通る事が出
来ず、一日間防空壕の中で過ごしました。
食糧は無く食堂に残ったコツペパンをそ
れも埃をかぶつたのを皆さんと手で拭い

ながら食べました。三日目になり漸く火
もおさまり帰路につきましたが、街も道
路も死体で一杯です。浦上川を手さぐり
で歩きましたが、死者をかきわけてやつ
と浜口町へたどりつきました。そこで目
にしたのは死体だらけの町でした。そこ
へ来て、たいした怪我でないようなので
一寸手伝つてほしいと大八車と一緒に来
ました。それは死体のかたづけでした。
手袋も無く素手で死体を大八車に乗せ
一ヶ所に集めるのです。一回に十人程集
めそこへ電車の枕木をバールではずし、
枕木を井げたに二メートルに

へ死体を十人位入れて油をかけ火をともしたものでした。それを四・五回続けました。悪臭とか匂いも全然感じず、只ぼう然とあちこちの死体を眺めながら帰途についたものです。

今思い出すとゾツとします。核と云う

名を聞いただけでゾツとします。

私は十二月二十日で九十才になりました。

た。

医者からは四十才まで生きたら良い方だと云われ、白血球赤血球が健康な人より半分しかありません。よくぞ九十才まで生きたものだと思い、原爆で亡くなられた人のご冥福を御祈りするのみで

す。

ピカドンの日^ひ

西^{にし}光子^{みつこ}

八月六日の朝、台所に座つて朝ご飯をひとくち口に入れた時、南の天窓がピカツと強く光りその後ドドドツと何かが崩れるような音が続いた。箸を置いて慌てて家の前の道へ出てみると、近所の人も何人か出ていた。広島方向の空に煙がもくもくと空高く上がつていて、その時は、広島市との中間にある三菱重工がやられたのかと思つた。

私は結婚していたが、主人は相模湾の警備へ行つてしまい、主人の実家は岡山

県上房郡^{けんじょうぼうぐん}（現在の高梁市^{たかはし}）の山奥で不便な場所だつたため、広島県可部町の実家に住まわせてもらつていた。その実家近くの役場の前で大きなかまどでお米を炊き、近所の人でおにぎりを作つて、広島方面の被害者の人達へ届けるということになり、私は高齢の母に代わつて役場へ行つた。炊きあがつたご飯が程よく冷め、これからおにぎりを作ろうとしたその時、「朝日（旧姓）さん、あんたんちの弟さんがやられたようだから、早く帰りなさい。後はみんなで何とかするから・・・。」と近所の方^{かた}が教えてくれた。当時十二歳の末の弟は、動員学徒として

広島市内の疎開跡の整理作業に通つていたのだ。

広島市がひどい爆撃にあつたと耳にし、父は自転車で広島市に向かつた。一緒に

探していた近所の人が、血だるまの中学生が歩いているのを見て、自分の子供ではないかと近寄つて首からさげている鎖に付けた名札を見ると、朝日敏明とあつた。末の弟だつた。

「朝日君じやないか。おじさんはうちの子を探しに行くところだが、後ろに乗つて、おじさんの腰の辺にしつかりつかまつていろ。可部の家へ送つてあげるから。」

その途中で父と出会い、「おい、朝日さん、俺の自転車の後ろに乗せているのは、あんたんちの子供さんだよ。俺はまた引き返すからこの子を受け取つておくれ。」

父はそう言われ、びっくりしただろう。近くの家の人に一旦弟をお願いし、父は家に戻り自宅近くのダットサンを持つている人に運転を依頼して、毛布と座布団を二、三枚乗せて来た道を引き返し迎えに行つた。そうしてやつと弟を乗せて我が家に着いた時、表の縁台には近隣の医師が警察の指示で集められて、一休みしておられた。帰宅した弟の眼と心音くら

いは診られたが、特に何の指示もなかつ

た。しかし、弟はひきつけを起こすこと
が多かつたので、母は枕元に座つて口の
中へ手を入れ、舌を噛まないようとに必
死だつた。祖母はその反対側で、時々水
や牛乳を飲ませていた。私は足元の方か
ら布団に手を入れて、何もわからないよう
に素人判断で、足の血液が留まらないよう
に二本の足を心臓の方へとなでていた。
母が食事に何を食べさせていたかあまり
覚えていないが、七日はまだ元氣で、布
団から出て、床の間に飾つてあつた日本
刀を引き抜いて「アメリカをやつつけて
やる。」と振り回していた。しかし八日
にはさすがに起き上がる元氣もないよう

だつた。母と祖母は枕元から離れること
はほとんどなかつた。

九日の明け方、なでていた弟の足が何
だか冷たくなつてきたので、寒くなつた
のかと思い、蔵の二階へ湯たんぽを取り
に行くと言つて私はその場を離れた。そ

の私を祖母が追いかけてきて、「もう湯
たんぽはいいから、早う帰りなさい。」
と言つた。戻つて再び足に手を当てた
時、「なるほど・・・湯たんぽではどう
することもできないわけだ。」と感じた。
足の先から死の兆候が出ていたのだ。

そして八月九日午前十時半、弟は祖母、
母、私の前で息を引き取つた。

戦争への責任はなくとも

藤原
治子

昭和二十年八月六日の朝。

私の母は、六月に生まれたばかりの娘（私）を抱いて田舎に疎開を頼むために広島駅に赴いたところでした。実家は、元安川の傍の産業奨励館（今の原爆ドーム）の近くにありました。母の母、息子、妹、叔父の四人がその家にいました。

八時十五分。原子爆弾が落とされ、産業奨励館の上空で炸裂しました。広島の町は火炎と煙に包まれた死の街と化しました。

母は、多くを語りませんでした。語らなかつたというより、語るべき言葉を持たない程の悲惨だつたのです。

した。私の祖母、兄、叔母、大叔父たち家に残っていた四人も一瞬にして亡くなつたのです。殺されたのです。勿論、母と私が帰るべき家も跡形もなくなりました。

既に夫と一人の弟はレイテで戦死、二人の弟は未だ戦地にあり生死不明、という状況にあつた母。この状況で、乳飲み子を抱えた若き日の母がどのようにして辛苦を乗り越えたのか想像もできませ

母・時子の残した短歌集「命」から

*母が子が命果てにし焼け原の

秋日にたてる何ものもなし

*野晒しの遺骨無き子よ日本の

さくら見たからとく帰り来よ

上空から人間の手によつてボタン一つで落とされた原爆は、数十万の人間の命を一瞬にして奪いました。東京も日本各地も空襲を受けて焼け野原となり多くの命が失われました。そのかげでどれだけの人々が苦しみ、悲しみ、絶望を味わつたことでしょう。母や私もその中の一人に過ぎません。

*元安川筋ややに曲がりたるこの一角に

吾子死ににける

アウシユビツツでは、人間の手によつて人間の眼の前で数百万人の命が虐殺されていったのです。そして、日本人も外地で多くの人々の命を奪うことを義務づけられ強制されました。若者を戦地へ駆り出した為政者達は、みんなそのことを

*母は子の戦死を知らず子は母の

爆死を知らず果てにけるかも

*母は子の戦死を知らず子は母の

忘れてしまうようです。

「戦後七十五年」とは、戦争をしない

時間が七十五年続いたということです。

私たちちは、多くの犠牲のうえにある戦後

を七十五年間、生かされてきたのです。

七十五年前の戦争の「戦後」をこれから

も続けて欲しいと私は、強く願つていま
す。

七十五年前の戦争に子どもだった私たちの責任はなくとも、伝えていく責任はあるのです。辛いけれど、哀しいけれど、思い出したくないかもしれないけれど、忘れてしまわないで伝え続けることが私たち世代の努めではないでしょうか。子こ

や孫やその孫の時代にも戦争をさせない
ために。

私の原爆記

堀田 和子

その日は朝から太陽の照りつける暑い日でした。家の前は田んぼが広がり遠くには川が流れている開けたところでした。

昭和二十年八月六日、私は小学校六年生で疎開先の安小学校に通学していました。そのころは学校に行つても勉強するよりも勤労奉仕のほうが多くて、勉強はあまりありませんでした。その日も学校に行つて大掃除をしていました。用務員室にいたとき急にピカ!!と光つたと思う

としばらくしてドーンと大きな音がして何事かと耳をそばだててました。棚のものが落ちて地響きがしたように思いました。慌てて外に飛び出していました。

学校の校庭に集合して校長先生の話を聞きしばらくして下校しました。私の家

は歩いて二十分くらいのところにあります。川のほとりを歩いて帰りかけますと急に、雨が降り出しました。見ると黒い雨です。傘も持たずすと雨の中を歩いて帰りました。この雨が問題の黒い雨だつたのです。放射能をたつ。ふり含んだ毒の水だつたのです。何も知らない私は

それを全身に浴びたわけです。

お昼ご飯を食べて外を見ていたら空から大きな物がふつて来ます。ふわふわと風に流されて家の前の田んぼに落ちました。

た。大きなとたんでした。空を見るとドーナツ状に黒い煙が丸く輪を書いているのが見えます。広島市内から三十キロ離れています。いるところにいました。

翌日、親戚のいとこの中学一年生の子が返つてこないと聞かされ、父は探しに行きました。市内に入ると一面焼け野原がれきの道で、そこここに人が倒れいる状態でお水をくださいお水をくださいと言つてたそうです。市内の建物疎開の為に動員され道幅を広げるために家を壊

す仕事をしていました。八時集合で丁度仕事にかかりたとき原爆が頭上で炸裂しました。

頭の毛も着ているものも一瞬で焼けただれ皮膚まで焼けてしまつたのでした。探し歩いてもみな焼け焦げて見極めがつかず、ベルトのバックルの裏をかえして名前を見つけたといいました。顔も体も一瞬のうちに焼けてしまつた無残な中

学生たち、どんなにか熱かつたことでしう。父はその後半年から一年、足に傷ができなかなか治らなかつたそうです。体もだるくゴロゴロ休んでいました。原爆から一日目、学校から呼び出しが

かかり、広島から歩いてきた被爆者の方々を学校で受け入れ救護所を設け手当をしました。そのお世話を私たち小學生がすることになりました。道を歩いている姿は手の先からぼろが下がつていて、室に並んで寝かされていました。どんな救護をしたのでしょうか。水をくださいと言わせて差し上げることくらいしかできなかつたと思ひます。私達は黒い雨による被爆者手帳はいただけませんでした。しかしこの援護活動により友人同士の承認により手帳を何年か後にいただきました。

私は三十年後甲状腺腫瘍を発し甲状腺を切りました。その数年後子宮筋腫を発し卵巣も取りました。ホルモンを作る機能を二つまで失い、体調を崩してすぐにつかれるようになりました。休んでは動き、休んでは動くという状態です。食生活にも気を付けています。

しかし親が食べ物に気を付けてくれたお陰でここまで長生きできただと思つています。

母・叔母から聞いた被爆当時の様子

山本 美智子

私は、長崎市内で生まれました。昭和十八年三月生まれですので、原爆投下時の時は、二才半でした。だから一緒に生い活していた十二歳上の叔母、母から聞いた話です。

皆様もご存じの通り長崎の町は、坂と階段の多い町です。私達は、大浦相生町といふ所で、私達が住んで居た所は、階段（石段）を三、四十段位登つた所に自宅がありました。（父は戦地へ）叔父、叔母、祖母、母と私の五人で住んでいま

家のえん側で遊んでいたそうです。午前十一時すぎに、とつぜん爆風がおきたそうです。みんなが我に返つた時、私が叔母の近くにいなくて、さがした所、前の家のトイレの扉の前に座つていたそうです。約十m位吹きとばされていました。

自宅の廊下のガラス戸や障子の紙等全部われたり、ハガレたりしていたそうでした。一週間位たつてから、母の実家へ疎開する事にしました。私は母におんぶされ

て、汽車に乗るためには歩いたそうです。

長崎はチンチン電車も走っていますが、

もちろんうごいていません。

原爆が落ちてから数日がすぎてました
が、外を歩いていると建物が焼け落ち
て、外から家の中が見えるほどになつて
おり、家の中でテーブルを囲んでいた人
達の亡骸が見えました。川の周りは、特
に多かつたそうです。長崎駅から三駅か
四駆歩いて行つても汽車には乗れなかつ
たそうです。

母の実家は、長崎県の東彼杵郡千綿で
すので、たぶん、棟早あたりから汽車に
乗つたのだろうと思ひます。それから小

学三年生が終わるまで千綿に居ました。
四年生から長崎の市内に引越ししました。

母は、よく髪の毛が抜けたりしていま
した。いろいろ叔母や、母から話は聞い
てましたが、忘れました。最後に、原子
力発電所は、東日本大震災のような事が
起きたと、後始末等、かんたんに出来な
いので、早く処分できるようにしてもら
いたいです。

今だに原爆の、後遺症で苦しんでいる
かたもいらっしゃいますでしょうし。

私は東京に出て来た頃、会社の方に、
「あんまり原爆の事は口にしない方がい
いよ」と言われました。偏見だと思いま

した。長崎に居る時、言われた事は、
ませんでした。

資料

1

広島の原爆被害の概要

広島市原爆投下時の状況

1945年（昭和20年）8月6日（月曜日）、深夜零時25分に出された空襲警報が午前2時10分に解除され、午前7時9分にまた警戒警報がなりました。

この時はアメリカ軍機1機が通過していったため、警報は午前7時31分に解除され、人々は防空壕や避難場所から帰宅し、それぞれの1日を始めようとしていました。

そして午前8時15分、人類史上最初の原子爆弾が広島に投下されました。

原子爆弾は、投下から43秒後、地上600メートルの上空で目もくらむ閃光を放って炸裂し、小型の太陽ともいえる灼熱の火球をつくりました。

爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方へ放射されるとともに、周囲の空気が膨張して超高压の爆風となり、熱線、爆風、放射線が複雑に作用して大きな被害をもたらしました。

この一個の爆弾で放射線による急性障害が一応おさまった1945年（昭和20年）12月末までに約14万人（誤差±1万人）が死亡したと推計されています。

熱線による被害

爆発と同時に爆発点の温度は摂氏100万度を超え、空中に発生した火球は、1秒後には最大直径280メートルの大きさとなりました。

この火球から四方に放出された熱線は、爆発後100分の1秒から約3秒間、地上に強い影響を与え、爆心地周辺の地表面の温度は3,000～4,000度にも達しました。

（鉄の溶ける温度は摂氏1,536度）

火傷は熱線に直接面した部分にのみ生じており、爆心地から3.5キロメートル離れたところでも、素肌の部分は火傷をおいました。

また、爆心地から600メートル以内の屋根瓦は、表面が溶けてぶつぶつの泡状になりました。

樹木への着火も多く、約3キロメートル以内では、電柱、樹木、木材などが黒焦げになりました。

爆風による被害

原子爆弾の爆発の瞬間、爆発点は数十万気圧という超高压となり、周りの空気が急速に膨張して衝撃波が発生し、その後を追って強烈な爆風が吹き抜けました。

衝撃波は、爆発の約10秒後には3.7キロメートル先まで達し、その圧力は爆心地で1平方メートルあたり35トン、最大風速は秒速440メートルに達するという強大なものでした。

爆風がおさまると、中心部の空気が希薄になり、周辺部から爆発点に向かって強烈な吹き戻しがありました。

爆心地から半径2キロメートルまでの地域では、爆風により木造家屋はほとんどが倒壊し、鉄筋コンクリート造の建物も、崩壊はしないものの、窓は全部吹き飛ばされ、

内部はことごとく焼失するなどの大きな被害が生じました。

爆風により人々は吹き飛ばされ、即死した人、負傷した人、倒壊した建物の下敷きになって圧死した人が相次ぎました。

放射線による被害

放射線は、人体の奥深く入り込み、細胞を破壊し、血液を変質させるとともに、骨髓などの造血機能を破壊し、肺や肝臓等の内臓を侵し深刻な障害を引き起こしました。

さらに原爆は、爆発後、長時間にわたって残留放射線を地上に残しました。このため、肉親や同僚などを捜して、また救護活動のため被爆後に入市した人々の中には、直接被爆した人と同じように発病したり、死亡したりする人もいました。

後障害について

原爆による放射線は、被爆直後の急性障害（発熱、はきけ、下痢など）だけでなく、その後も長期にわたって様々な障害を引き起こし、被爆者の健康を現在もなお脅かし続けています。

1946年（昭和21年）初め頃から、火傷が治ったあとが盛り上がる、いわゆるケロイド症状が現れました。

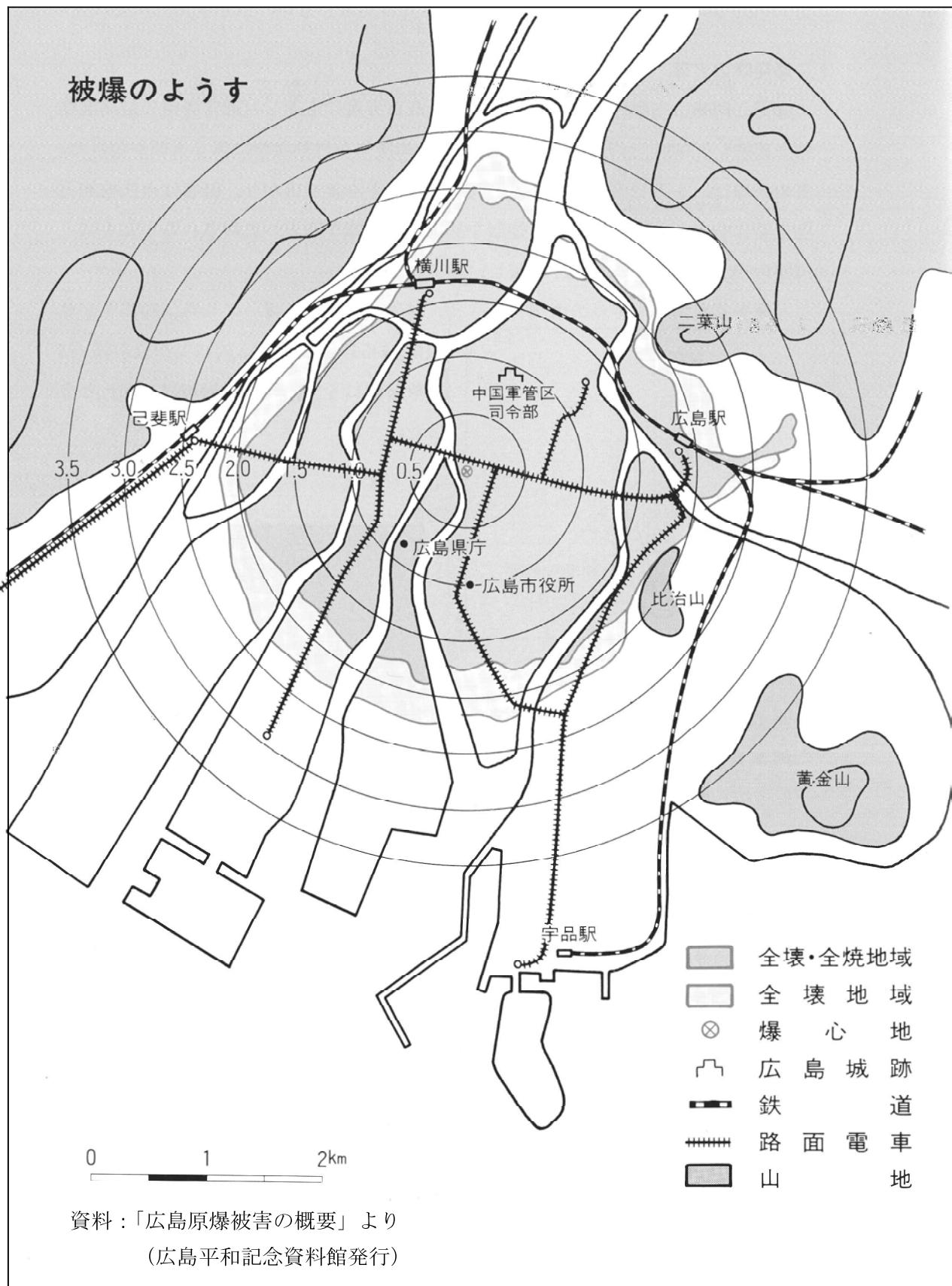
また、胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れても小頭症などの症状が現れることもありました。さらに、被爆後5、6年が経過した1950年（昭和25年）頃から白血病患者が増加し、1955年（昭和30年）頃からは甲状腺ガン、乳ガン、肺ガンなど悪性腫瘍の発生率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が現在も続けられています。

（資料提供：広島市）



広島市原子爆弾被害状況図



原子爆弾による被害数値(広島)

1 人的被害

各種の調査が行われているが、いまだに確実な数の把握は不可能とされている。

参考の推定値としてつきのようなものがある。

(1) 広島市役所調査課発表（軍関係を除く。）昭和 21 年 8 月 10 日

死 亡 者	118,661 人
行方不明者	3,677
重 傷 者	30,524
軽 傷 者	48,606
無 傷 者	118,613
計	320,081

(2) 広島県警察部発表（軍関係を除く。）昭和 20 年 11 月 30 日

(『広島県史・原爆資料編』により一部訂正)

死 亡 者	78,150 人
行方不明者	13,983
重 傷 者	9,428
軽 傷 者	27,997
一般被災者	176,977
計	306,535

(3) 広島、長崎両市が国連へ提出した資料 昭和 51 年 11 月

死者 広島市においては、約 14 万人（誤差±1 万人、1945 年 12 月末までの推計）

2 建物の被害

全 燃	55,000 戸
半 燃	2,290 戸
全 壊	6,820 戸
半 壊	3,750 戸
山林火災	12 か所

資料：広島原爆被害の概要

(広島市平和記念資料館発行)

長崎の原爆被害の概要

(長崎市ホームページより引用)

8月9日

前夜から連続する警報・・・・・・その中で、9日朝は、快晴無風であけた。

軍需工場の多い浦上に、戦闘帽、巻脚はん、防空ズキンを肩にした人たち、女子挺身隊、動員学徒の群れが汽車、電車に鈴なりとなつて続々と終結し、一刻、緊迫感が渦巻いてゆく。

空襲警報発令！

多くの市民は、これを「定期便」と呼び、また「時報」とささやき合っていた。やがて、警報が解除となり、いったん付近の防空壕などに退避していた工場従業員が職場に戻り、家庭の主婦たちも昼食準備に取りかかっていたところ――

突如、ラジオが、“B29、島原半島上空を北進中”を伝え、市民の中には、飛行機の爆音を耳にし、東方上空に「ギラギラ光るB29」、浮遊する落下傘を眺めているものもあった。

香焼島（爆心地から南約10キロ）に駐留する高射砲隊は、眼鏡の中にB29の機影を捉えて追跡し、金比羅山（爆心地から南東約1.7キロ）高射砲隊もまたいっせいに砲身を向けた。だが、90式測高機が測定した高度は、9500～10000メートル。射程圏外。やむなく「戦闘態勢乙」・・・・・・なかには、浮遊する落下傘を目標にして射撃訓練を行う分隊もあったという。兵員は、鉄帽をはずし、上着を脱ぎ、上半身裸の者も多かった。

午前11時2分！！

異様な閃光が走り、すさまじい爆風、爆風が大気を裂いて来襲。山野にどよめくごう音、地軸をゆるがす衝撃波、熱線が照射し、火事嵐が荒れ狂った。

市内の記録

昭和20年8月9日午前11時2分。

原爆搭載機ボックス・カー号（機長チャールス・スヴィーニー少佐25歳）は、高度9,600メートルの上空から第二号の原子爆弾（プルトニウム爆弾）を長崎に投下した。彼の手記によると、長崎の市街も、第一爆撃目標都市小倉と同じく雲におおわれていた。スヴィーニーはレーダーによる爆弾投下もやむなし、と決断していた。すでに燃料は沖縄基地までようやくという状態に欠乏し、爆撃航路ただ1回分だけが残っているに過ぎなかつた。示された照準点への爆弾投下まであと30秒、トーン・シグナルが作動し、爆弾倉の扉が音をたてて開いた。あと25秒。そのとき、はからずも爆撃手ビーハンの目に雲の切れ間から市街の一部がわずかに見えた。そこは、三菱グランド（浜口町）から三菱製鋼所、同兵器製作所（茂里町）にかけての中間地帯だった。爆弾の投下は目視爆撃で行えということが示された重要命令だった。そこで、ここが急遽投弾目標となつた。

爆発は、目標地帯からおよそ5～600メートル北方にそれで、松山町171番地のテニスコートの上空で起こつた。（通称爆心地公園の上空）

爆発時の諸状況は、次の通りであった。

1 爆発点

爆発点の高度についてはいくつかの推定値があるが、現時点では 503 メートル～±10 メートルが信頼度の高い数値と考えられている。

ちなみに、昭和 20 年 10 月、木村一治（もとはる）、田島英三理化学研究所員が、井樋ノ口交番所の庇の影、浦上天主堂の石碑の影、長崎医科大学附属病院の焼け跡で見つけた影の三方の影から爆心を測定し、そのときは爆心点高度を 490 メートル～±25 メートルとしていた。

2 火球と熱線

爆発と同時に空中の一点に摂氏数千万度ともいわれる火球が発生、体積が急速に膨張した。爆発から一万分の一秒という超ミクロの瞬間にその直径は約 30 メートル、温度は摂氏およそ 30 万度になり、さらに火球は百分の一秒から一秒の間に直径 100～280 メートルに達した。

火球から放射された熱線は、爆発直後から約 3 秒間にわたって外部に強い影響を与えたと考えられている。

特に人体に熱傷を与えたのは、爆発後の 0.3 秒から 3 秒までの間においての赤外線であった。一説では地上物質の表面温度は、原爆の直下では恐らく 3,000～4,000 度にも達したと推定されている。

3 衝撃波と爆風

爆発に伴って生じた物凄く強力な気圧変化は、爆発直後異常な速さで衝撃波となって広がり、物を破壊し、押し潰した。またそれと同時に強い爆風が起り大被害が発生した。

4 原子雲（きのこ雲）

爆発時の巨大なエネルギーは、地上のものを吸い上げ、吹きあげ、巻き上げて原子雲を立ち昇らせた。この原子雲は刻々と色と形を変えながら、ぐんぐんと上昇した。その上昇速度は右のようにみられている。

約 0 分 30 秒	3,000 メートル
約 1 分 30 秒	4,500 メートル
約 2 分 30 秒	6,000 メートル
約 4 分 30 秒	7,000 メートル
約 8 分 30 秒	9,000 メートル

原爆投下機の機長・スウィーニーは「垂直の雲は驚異的なスピードで上昇を続けており、その色はつねに変化していた」「上昇してきた雲が、7,500 メートルの高度で白くきのこ状に膨らみ、さらに加速しながら上へ噴出を続け、9,000 メートルにいた我々を追い越して、少なくとも 14,000 メートルにまで達した」とその手記に記している。

このきのこ雲は、近郊はもちろん遠く県外でも望見されたが、意外にも、爆心地に比較的に近い距離に居た者には、きのこ雲は見えなかつたと証言する者が多い。

立ち昇ったきのこ雲の雲頂はやがて崩れ、次第に東方へ流れていった。雲の移動速度は時速約 12 キロメートルと推定されている。

長崎原爆の被害状況図



(長崎市ホームページより引用)

被害状況

死者 73,884 人・重軽傷者 74,909 人 合計 148,793 人

罹災人員 120,820 人 (半径 4 キロ以内の全焼全壊家屋の世帯員数)

罹災戸数 18,409 戸 (半径 4 キロ以内の全戸数。市内総戸数の約 36%)

全焼 11,574 戸 (半径 4 キロ以内。市内の約 3 分の 1 に当る)

全壊 1,326 戸 (半径 1 キロ以内を全壊と見なしたもの)

半壊 5,509 戸 (全焼全壊を除く半径 4 キロ以内を半壊と見なしたもの)

この数字は長崎市原爆資料保存委員会の昭和 25 年 7 月発表の報告によったものだが、これが今日の通説となっている。

ちなみに、昭和 20 年 (1945) 9 月 1 日現在の長崎県知事の報告書 (第 11 報) には、屍体検視済のもの 19,743 人とあり、この検視はほとんどが原爆直後の混乱期に、被災地現場で行われたもので、即死状態の氏名不詳、性別不詳といった、いわゆる身元が判明しない死体も約 2,000 体に及んでいる。累々たる死体の群れ、黒焦げや、ひどく損傷した遺体を目前にしては、身元確認の術もなかったことが、この数字からもうかがえよう。

またこのほか行方不明として届出のあった者が、1,927 名あり、何れも死亡したものと思われるともある。



資
料
2

めぐろ歴史資料館の戦争関連収蔵品紹介

国民服

昭和 15 (1940) 年に、「国民服令」が公布され、男性は背広などの平常服に代わり、国防色であるカーキ色（軍服と同じ色）が用いられた国民服の着用が定められました。



臨時召集令狀（赤紙）

徴兵検査の結果徴兵されなかった人や、除隊して予備役になっていた人など、在郷軍人に召集をかける際に発行されました。用紙が淡紅色であることから、その令状を赤紙と俗称しました。

砂弾

昭和 13（1938）年に公布された国家総動員法により、軍事優先の経済統制が進められ、金属製品の回収や家庭用品等に鉄や銅を使うことが禁じられました。これに対して、木製や陶製等の代用品が作られました。この砂弾は、中に砂を入れておき、火に向けて投げ入れました。空襲時の消火活動に使用しましたが、焼夷弾の威力にはほとんど無力であったといわれています。



千人針

一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫い、千個の縫い玉を作った布です。出征兵士の武運長久を祈って贈りました。中央に「身体健全武運長久」の文字が見えます。

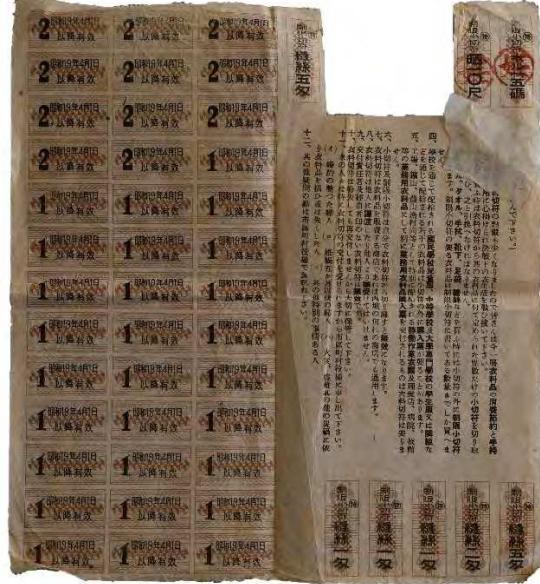


衣料切符

昭和 17 (1942) 年より、物資不足のため、衣料品は点数切符による配給制となりました。点数によって買える衣料品が決められていましたが、下着などがまかなえる程度の点数しか与えられませんでした。



(表)



(裏)



妊産婦加配通帳 (国の宝)

昭和 17 (1942) 年に登場した母子手帳の一つです。妊産婦に対して「加配」や「特配」という食糧を多く配給する制度を設けて、妊産婦や子どもたちの生活を支援しました。

以上、めぐろ歴史資料館所蔵

所在地

目黒区中目黒三丁目 6 番 10 号

最寄り駅

東急東横線・東京メトロ日比谷線
中目黒駅から徒歩 12 分

資
料

3

平和の大切さを身近に感じよう

区内には、平和を願って設置された記念碑などがあります。
ぜひお立ち寄りいただき、平和の大切さを身近に感じてみませんか。

目黒区民センター公園内 めぐろ平和の鐘



人間国宝で名誉区民の鋳金家、故・香取正彦氏の作品で、広島市平和記念公園の平和の鐘、カナダ・バンクーバー市の平和の鐘と同型の、いわば三姉妹に当たる梵鐘です。

昭和 60 年に目黒区が平和都市宣言をした記念として、香取氏から寄贈された梵鐘を「めぐろ平和の鐘」と命名し、世界の恒久平和と区民の限りない幸せを祈念して区民センター公園に設置しました。

香取氏は、戦時中の金属供出で全国からたくさんの方々の鐘が失われたことを悲しみ、戦後は平和の願いを込めた鐘を作り続け、昭和 52 年に人間国宝に指定されました。

平和祈念の彫像「花の影」



彫塑家、故・朝倉文夫氏が、大正 11 年第 4 回帝展に出品した作品です。陽の光を全身に浴びて、大空に向かって伸びやかに両手を差し出す姿は、まさに普遍的な平和のシンボルにふさわしいものです。

朝倉氏及び「めぐろ平和の鐘」の作者・香取氏の各遺族、朝倉彫塑館のある台東区のご厚意により、世界の恒久平和と区民の限りない幸せを祈念し、区の平和の象徴として、平成 2 年に区民センターに設置しました。

朝倉氏は、昭和 23 年に文化勲章受賞、26 年に文化功労者となり、近代彫塑界に大きな足跡と影響を残しました。

被爆二世樹木

「アオギリ」



「カキ」



広島で被爆したアオギリ、長崎で被爆したカキの木が、それぞれ焦土の中で再び芽を吹き成長しました。この被爆二世樹木は、被爆したアオギリ、カキの木から採取した種子を育てて苗木としたものを、被爆者の慰靈と平和を祈念して、目黒区の被爆者団体「萌友会」が区民センター公園内に植樹したものです。

この木を平和の象徴のひとつとして、これからも大切に育てていきます。

所在地

目黒区目黒二丁目 4 番 36 号
目黒区民センター公園

最寄駅

JR 山手線・東急目黒線
都営三田線・東京メトロ南北線
目黒駅から徒歩 10 分



中目黒しぜんとなかよし公園内
平和の石



国際平和年の昭和 61 年、目黒区職員と広島市職員の交流がきっかけで、被爆した広島市庁舎の階段の一部が荒木武市長（当時）のメッセージとともに寄贈されました。

区ではこれを核兵器廃絶と平和を願う区民の心を表すものとして「平和の石」と命名し、設置しています。

荒木武市長（当時）からのメッセージ
目黒区民の皆さんへ

この度、目黒区長からの要請により、被爆庁舎の階段の石をお送りします。

この石が、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現という、広島の悲願を訴える生き証人として、目黒区民の皆さんと共に生き続けることを願っています。

昭和 61 年 2 月 5 日

広島市長 荒木 武

所在地

目黒区上目黒二丁目 19 番 18 号
中目黒しぜんとなかよし公園

最寄駅

東急東横線・東京メトロ日比谷線
中目黒駅から徒歩 5 分



常圓寺

被爆子育て地蔵尊



目黒区八雲にある常圓寺の境内には、顔だけが石にはめ込まれたお地蔵さまがあります。元々このお地蔵さまは、広島の原爆ドーム近くにある西蓮寺というお寺で子育て地蔵として親しまれていました。

1945年8月6日8時15分、広島市は原爆で破壊され、爆風によりこのお地蔵さまは倒れた塀の下敷きとなり、胴体はばらばらになったものの、奇跡的にやさしいお顔だけが残りました。

その後、お地蔵さまを被爆の生き証人として譲り受けた目黒区在住の方が東京に持ち帰り、1952、3年頃に常圓寺に託されました。そうしたご縁で、現在も毎年8月6日に常圓寺では法事が営まれています。

所在地

目黒区八雲一丁目2番10号

小杉山 常圓寺

最寄駅

東急東横線

都立大学駅から徒歩5分



- 内容につきましては、体験者の記憶を尊重しそのまま掲載しているものです。
- 被爆体験記録の編集に当たり、御寄稿いただいた皆様の御了解のもと、原文の意図を損なわない範囲で一部加筆修正しております。

被爆体験記録集

発行日：令和3年2月

発行：目黒区

編集：目黒区総務部総務課

〒153-8573

東京都目黒区上目黒2-19-15

電話：03（5722）9205

印刷：三協印刷株式会社

主要印刷物番号

2-46